

誹諧

裳
廼
味
操
間

卷之三

浪花	附名陽
西鶴	冬山
一時新	万海
六公記	小磨
西吟	
荷兮	横船

特別

~5

6053

4



ふえとて葉内すしの
目と一のをくおひる
あまや

三
ゆらり〜家の今日と打志ら進

一句右流を何は立あな

舞まの空を霞は花すつら枝

婦め乃らる後あつるよとまのそら

孫重

今時の娘

けりいさ

踊まるるまき〜又じとよよ

力振地

秋もく〜西陳あつる所造

鏡堂心と〜月れふやうに

親の目よ何ま頼り知〜と今亦

と〜みさ〜と馬まらる那

音ねのいあのははさのふわ〜に

孫重

東海道の難

徳田金吾

お智の縁えん花はなも味淡と〜なわ

け眠ねつらわと〜ん氣き極ごく

脇はあり〜言葉のゆ〜またたの

府極は近氣でけ〜わ〜さあ〜

所ところ作しよ〜あ〜の草くさか〜端はた

西よ草の草〜え〜

若れ草〜あ〜て〜

家いえ極ごく 意い点てん

脇書よ云脇よあ〜
〜のまのむ〜と〜
〜りのな〜又書あを
〜と〜え〜と〜
〜あ〜と〜極あ〜
〜と〜と〜極あ〜
〜と〜と〜極あ〜

若草 意点

鳥居の白

船と揚書と云々の
知えくくく一百
さあまた又あまた
あつたのまうく
るりるり

鳥居の白

船書は雲人の書か
益々をまうくは云と
おゆいんまうく曲書
いりく又云云二句と
授きく夜かめわ
ねりてくくくく

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

鳥居の白

付墨十二句

長一句

雄波能林判

西鶴事

能風と云ふは流のの方と云ふは能風白能
を付くまふは流のの方と云ふは能風白能
能風の面と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風の面と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風の面と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風の面と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風と云ふは流のの方と云ふは能風白能
能風の面と云ふは流のの方と云ふは能風白能

能風と云ふは流のの方と云ふは能風白能

第三 五息を也
同く〜の脇書あり
あり〜

第五 長馬也
この巻の巻下あり

脇書の 五息

脇書よ能あり〜とある
むの表よ能と定
ひる文字よとされ〜
一句のなりい合す所
連ぬはこのいまい〜
く〜い〜るる〜

舞姫踊 西陳のうま
〜五息也 脇書あり
〜い〜い〜い〜い〜
〜い〜い〜い〜い〜

三日月をわつと紙と紙と

花のりりたるも花

枝は切亦を恨るまあり〜

何れとて子も人なりとて

心も〜のまゑ福の酒をりり

草を舞花衣お装束なり

膝後者こ〜い

侍あり〜系れり〜

能なり

舞〜い〜い〜い〜

始り〜り〜後を〜り〜

踊〜り〜い〜い〜い〜

秋を〜く〜を陳何つ〜町造

鏡雲を〜い〜の〜り〜

三

五

象極 各点ゆく
 脇書し排ししとあり
 於方の長し如は備
 方より点わるとまゝに
 各許の各点しあり
 二点定めしとあり
 所よわれ連歌の
 巻よ
 法とてなむとありと云
 とありと云ふとあり
 つらつらと云ふとあり
 とらふと云ふとあり
 連歌の巻巻也

親の目よ何ま教り節は今亦

いふ心ゆくま鳥道りけり

歌のいふれつきのるわ〜れ

お智の籠籠乃味淡と〜あり

此眠つらつらと云ふ人象極

折紙〜と云ふ草紙場

去白の目と云ふ湯と能と云え

和〜と者よと云ふ草紙

和〜のつと和乃和と云ふ

和〜のつと和乃和と云ふ

和〜のつと和乃和と云ふ

和〜のつと和乃和と云ふ

三

三

三

人中の世を 長長也
當りたすむら
業修定といふ所
とまひまらぬ

はあうらまを又も書よふは
人中の世の如くは
情むかへ黒のこく情翳
茶と老うく書よ松水ト覺
心依のる方いふうううう月
いりふまは今の麻村さるる心

露をねよねうく妙く心所は
思く身は衣よ望わうる道
死の前は急仏書よ打こり中
けまらまきぬいさうく船の抑
花深く見らる眺望よは歎
うらまは朽心蝶の翩翩

偽点二十句内長三

一時斬判

卷中切者いみじし

此二卷の長きく深く深
く難む所なく
またまたみちあはれ
他の巻より記さるる
る

三日月のありきい科と紙を

疑アから出つとの道も景のた

とよみよのいしとあしうを

杖も切竹から恨いさあし

傾ぬはひじら人のとまむ

室のあえねる酒をのみ

草の舞臺の衣おろし

景よりやいりれてあら

對面心口書は海新とれど

和くと者くよんよぬる外

をふらつた初の様も昔も通く

秋より文心法系から歌

引ら歌らぬや悟く孫の内

志程知くくくまふ作く定

ほくくくぬいよる
おみよふはほまきく意
也賜歩けくくくく
分キか〜

ほくくくく又も響くまはつて

人申く地を能のむるま

懐し程黒くくく勝競駈

名ふを若くくく松林下菴

山法れをりまきくくくあ月

れをふまはれ麻射るるとら

法蓮をく執ぬハ 意
 是未とあるハのうは
 口とまゝといわらうと
 のうは作者自註よ
 しくうく一法方の点
 もおぼくを評めく
 意点のねえくく

雪踏をねむねくはめく法所深く

ちんくまゆ衣よ空阿病くま

死の前を忘れ義よ打とせり

法蓮くく執ぬハくく和の持

花深多くく眺るよみ現ゆ

くらく法行くじ蝶乃翩翩

二十を点

長四

内 孫重一

六孫判

此二巻を心算の類と
見ると是れもやと考ふ多
仏の作の合せしむ結ぶ
とてつづる
第三の編まよ
第三の編まよ
とや也如何十七卷
のうらつてと又と
くたていしつと
てまけりや知つて
一編の料と
文をくくくく
進てよと編書の
わけあり

三月月かありしと料と紙書鳥

花のさけりかんりもさ木のた
そり何せようくし七文字
何とやましく進ま

枚木四并の根をまきあし
一石竹中しつ力三よてい

傾舟と鹿毛ら人辰とさかん

ふせいのさるひ酒をなまき

草舟舞毛危の衣ぬれ信らあり

侍あり糸のさみ打忘られ

聾年うさ寝後ま枕まうせ
寝ましくこれ文をうけ

姁のらら後げまりと立おさ

踊るまじりまいむしとよ
むつしつ

秋月さかきあ陳あつと町造

新やうあしと月のをさわら
作まよん

綾雲か 脇書あり
 うし作者の自筆と
 へる所と作まよ
 は

親の目よあやう部は今女

すこひさかひ馬田りり

音あみく水のはまぢりあに

あみく

お智の猿籠の味淡きあり

あみく

け眠いつらまきん乱桜

折作くを美草花場

まぬり星の浦訃とれく

和借と者よ人とぬあめ

いんつゝま古乃橋も音あ

社よま心法楽かゝ款

あみく

我ら親い女情し孫乃内

あみく

鳥種さくさあそあ作定

お智の猿籠 協書よ
あみくさくさあそあ作定
書入よせしるあみく
ちりさ難と

那 病うし又色響よまらるる記

釋定しりりごとふと
感吟不科し

人中了せい私におゆるを供

僧に程黒の方捨競りの

別あひ共あくまや愛りよ松の下庵

山伏のちりひきううくさあり月

おもふ矢はかた麻射さあをら

露あよ程くぬはゆりあは

那 びくまら衣よ愛あくくつこ

これせよいふ
まうしはあり

死のあひ急佛衣よあことるを

那 けしうしあひいそく船の脚

あいのちのほし
あまのうらや

花添てん所眺望よ奴た

夢く成行しじ蝶の翩翩

二十一点内 長七
除重四

赤堂

朱心判

午 仲夏日

糸白 辛島ゆき

第三 糸島三つ目

二日月の赤糸料と紙と馬

糸白はあま

糸の麻りの糸も糸糸の心

板の切竹の根のまらうして

竹の根のまらうして

糸糸と糸糸の糸糸の糸

糸糸の糸糸

糸糸の糸糸の酒糸の糸

糸糸の糸糸

糸糸の糸糸の糸糸の糸

三

十

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど
さしあがり

引ぬる是の浦の街とれど
感心

引ぬる是の浦の街とれど
感心

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

引ぬる是の浦の街とれど

競馬 長崎
くくり月 平家
あとの巻よあ

露^露あはれはねのさく心所^{心所}は

あはれはねのさく心所は

とらふあはれはねのさく心所^{心所}は

死^死のあはれ念^念佛^佛をたふさる

はらへる^{はらへる}まゝあはれ^{あはれ}の肺^肺

花^花涼^涼く足^足の眺^眺望^望よんた

さる^{さる}はらへる^{はらへる}まゝあはれ^{あはれ}の肺^肺

加里二十三句

長十

内 繁七

万海判

葛凡の一卷每句

感吟不斜

發句 平島あく
揚書跡を此紙に
立志点の巻よ来

第三 無息あく
揚書よ可く
白作と何れと句意の
うくこころしう何
と何れと進する書
入るや

三
三日月のありき科を紙を鳥

花の居りたるも本れむ
科のあこころし
あつてく

枝の切竹も恨い喜あく
一句の

佐長紙をしらんあつてあ

いんあつて酒をあつてあ

草の舞臺の衣あつてあ

侍あつてあふのりあつてあ

舞のりあつてあ
揚よあつてあ

婿のりあつてあ
揚よあつてあ

とらあつてあ

秋あつてあ

後あつてあ

長点
最の折りの會
中一能味いなる
なり

親如月女何まらるる如に今す

かこひまの馬田さうりか

音やしあははさのるわん

お智の張毫の味淡きあり

山眠つらうと色しん流様

祈詔くさ若草の場

流ころし 長点
此歌希くよあ

まぬの星しよ浦の詞とれく

船くさ若草よえとぬ草一針

やのつた都の指も音あ

社りあ歌法示乃哥

あら歌の女が情く練の内

志種さうさあ中未修定

とよまきこりもたさ
しよん所くも響
のうこくくはきり
はうとふてうけはし
廓よまきつるさ
くい折らしかし
所まきく首尾はし
くうやうのさき
味いもるる

二十寸をく墨

内 環 一
長 四
丸 五
珍 二

春理奇

才磨判

三日月の赤を科と紙馬

花乃まはりみ道もまのむ

杖の切行志恨いまめく

倒衣はかしら人のま

心まのさえ杯を酒危あま

朝の舞着の衣おれあ

あつてしゆい
まふあふ
あつてしゆい
あつてしゆい
あつてしゆい
あつてしゆい
あつてしゆい
あつてしゆい
あつてしゆい
あつてしゆい

脇身六の 息を也

は者之自註
こいさきり手も向
え

第四 長魚如何
都方心忘れ巻のあ

侍交し糸のそめびやうくは

舞のき寝は枕まのり枝

婦のらか後けまりとまはとま

婦の字 不的也

踊あそびしあし又じとま

秋あそびし西原あつと町

新あそびしとま月めとわけ

下あそびとま

親の月よあまらう知らす今

下あそびとま馬田まらう

都あそびとまのほせのりあ

あつとまの月もあつとまの海や
水井の里よとま月舞と 都何

お智の旅あそびの味淡と

け眠つとまとまらん家と

所話くをま草六場

婦のらか 音息
脇書よ婦のらかと
うめまらとまをまらとま
あつとまのらかとま
言水方心の舞とま
けまのらかとま
能舞まらと

去雨の曇 極上点

脇書作者の自注は月
一は乾極点の極点
ありなり

船傍と 五五

脇書は舟の外の
第一は雲白の外の
一字は合より一は不
言の点のまるとるに

意種ありと 意中

脇書は舟の外の
第一は雲白の外の
一字は合より一は不
言の点のまるとるに

去雨の曇は浦の新とれり

釣竿 白翁

幸若客船西又東

和くと若くよくとわ草丁外

草の字をうらや

サ細

望みのつゝまの指も音通し

れり

秋よ文の法未春彦

秋ら新い女く修く練水内

近衛乃為りや

意行とくくくくくくくくくく

西のま工

不奇とく

はなうらゝいふと響よ生心内

何中しやい船のゆるき

括印を 舟のま工

僧を程名の方勝競駈

らむいさう

みよの者くくきよよ松の下巻

山伏のまのつらうくくくく月

おしよまつたま麻対りりり

あはれなるわがわがの心は所は

あはれなるわがわがの心は所は

あはれなるわがわがの心は所は

的中

あはれなるわがわがの心は所は

あはれなるわがわがの心は所は

あはれなるわがわがの心は所は

煤二十八

海四

河三

漢二

水同

檀木堂

荷分

感吟不遠

此表善悪の区註し不
及弁の巻くは素一

ふむの 腸を

莫怪煙中童回首と
あれ酒家といふは
アと陸の電蒙の詩の二
句とサとスとクと併
ひりしはつて此詩と
引つては此と各別
也素句と發して
能味くらく

草舞巻 皇息也
踊の句

両句毎行くくまふ
えく

舞の巻 腸を

物さくくあつて
まは借馬未也且く
き本のまもはひ約と
とり舞の巻はよひ
舞書不的也
舞の足部の白髪舞の舞
如とあり皇とある
る一巻白の巻
舞と云く病は
あり

讀書如と 平也

舞書向の巻
是くの雨の巻は
各別く

三日月のあつては科と紙を

日のちくさく

花の空りなりを草本の巻

三とんと花よ
碎り

樹の四竹の根いあめく

おまらよ
くのさうれ

御衣ははじり人のとやん

ふいふのちえ福く酒をあら所

莫怪煙中
童回首

草の舞巻の衣おれか

何れも糸のりか打まく

舞の巻後よ枕まつて

蛇さくさく
あつて

舞の巻後けわりと立のさ

あつて

踊の巻いじりよ

秋もくも隙あつて可造

おとと女の
隙あつて

讀書如す月月のさや

舞とてん草
あり

三 六

親の目よ 脇書

ことわりあふくわく
けねずんえうく論
語父母夜不遠遊の
むろくはくえよあた
あり

喜ぶべき 脇書

東海の大井川といふ
えうくく東海の大井
川あり東海といふ
ア

親の目よあまふくく今女

ことわりあふ

いんさく馬田りりあ

血氣勇

いあつきのりりた

東海の大井川

お智の猿籠の味淡とあり

溪泉のつらきくすく

げ眠つらとまきん氣はく

新伝くきよの草の場

喜ぬの星々海の新とけ

親くと若くよんとあ草の野

いんつ都の橋も音あ

秋より又か法ふかか歌

非路のねん

色 秋ら親を如く修く練の内

和文人 物りとして

意程知くして素符定

秋の目よ 脇書
作者の自註を合せて
いん編書の非路の
みんかきつ

二十四点

小帯一裁

裏

朱点二

長二

急八

古渡

横船判

婦の足は淺きまゝにして之のとき

身は乾いたる候へば孫の内

右より二句朱点也別台右より方

小帯より書わきごとく履装あり

此一書の内容は甚だしく註明
受書の内容を悉く記す

三日月のありきし軒を紙を鳥

花の房のしもの乃しきまかんを

花の房のしもの乃しきまかんを

杖の切竹かゝる候はるまきあしき

油紙

俵とほりし人かんとしきん

俵とほりし人かんとしきん

ふいよのふえ候はる候はるまき所

ふいよのふえ候はる候はるまき所

草は舞臺の衣装かかり

三
けりし糸のなまびかりて

舞の空を夜よ花まつて後

婦のりり 極意
踊せん句 極意
さくみ 無意

右三句点時句白く
善悪の介の巻よ
素

三
婦のりり後をかつき立のりき
踊あまきく河いじさふよ

秋来りゆくも陳あつと町造

一き雨のしきく
ゆくや談よき

舞あまきく月のかやけさ

秋高九日の前おねま

親の目よあまらう知れ今共

いほ戸孝悌 忠信のきくき

すくくくく馬田りあ

喜ぶしめれつきのるあ

お智の張舞の味淡とさり

藜水よりとくし

け眠いつらとまらん氣様

三
所詔
風景の別ほや
らんこ

所詔の句 点句
あまらう無
能く味いさる
中の眠とあ後く川

此非かのまきよ
極上点

○ 露 露よ花の匂く山所海

よくもろ衣よ笠あしつ終

死乃あけ念佛長よ打こり

正念めしとく去此不遠

はまをくまぬいしし水の脚

うらやうしあね

花深くこけ眺るよ双の

足所眺るのつとま

言くはあし心蝶乃翩翩

はまをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい
まをくまぬい

戲印二十六句

紅長 三句

楓長 四句

○ 四蹄

送月菴

西吟判



